

健康文化

祈禱の威力

矢尾田 祥子

「病は気から」とは、いつの頃から言われてきたのだろうか。国立大学病院という、科学知識の結晶のような職場に居ながらあまりにも浅はかな書き出しかもしれないが、「健康」という言葉からナチュラルに「医学」を連想したところで文章がすすむ訳でもないので、全く別の観点からの内容を選びたいと思う。

ここ1、2年、私は古典文学、とりわけ王朝絵巻風の物語をベースにした小説や著名な作家の私見に非常に興味を持っている。原文を読みこなして十分に味わえる域に及ばないのは残念ではあるが、古典中の古典と、言われる「源氏物語」などに至っては、高校の古文の授業をもっと真剣に受けていれば良かったと悔やまれる程、今頃になって夢中になっているという有様である。時代で言うところ平安期から鎌倉初期の貴族社会、それも朝廷中心の言わゆる上流貴族階層を扱った作品ばかりなので限られた範囲であるが、当時の人々の「健康観」がどのようなものであったかというところがなかなか面白い。科学と宗教は、大昔からあらゆる国において相容れない関係にあったし現代でさえ **controversial topic** であるけれども、古代後期から中世にかけての教養人達がいかに神仏の力を頼みにし、宗教に根ざした倫理観を持って生きていたかは驚くばかりである。

今から一千年以上昔のことだから、貴族であろうと庶民であろうと人は短命である。入内して天皇や上皇の後になるような上流貴族の姫に生まれたとすると、気が遠くなるような重さの十二単を着て身丈よりさらに長い髪をひきずって宮中に籠り、外出はおろか運動となるようなことは何ひとつしないで一生を終るのである。お産で命を落とすことなどめずらしくもない。安産の為にマタニティスイミングを始める妊婦も多い昨今から見れば、ほとんど動きもせずについて結果が難産とくればさもありません、とため息が出るというものだ。

そのような状態が常とされていた時代、さあ病気になったとするとさてどうするか。現代なら薬や注射などで簡単に治るような病気にかかっても、当時の人はあっけなく死んでしまった。伝染病が流行すれば悲惨なことは言うまでも

ない。平安期に院政をしき始めた一代の専制君主白河法皇の御代にも、赤痘瘡や痘瘡が猛威をふるい、下町の小路から内裏の中まであらゆるところで人々に襲いかかり、多数の犠牲者が出たとも言われている。当然その頃にも薬師と呼ばれていた医者はいた。医学的な知識がどの程度確立されていたかは想像もつかないが、薬湯などを作って病人に飲ませたりくらいの事はしていたらしい。しかし、公家社会の人々がまず頼みとしたのは「祈禱」なのである。

身近な人間の誰かが病気になった場合などは言うに及ばず、何か良くないことが起きたり、心配事や願い事があつたりすると、何はともあれまず祈禱であった。それも、大勢の僧が一度に読経したり、徳が高い、法力がすぐれているとされていた僧に加持祈禱を頼むと効き目が大きいと信じられていた。そもそも、病というのは「物の怪」が人間にとりついた為起こると一般に思い込まれていたその頃のことであるから僧侶達が全身全霊をかけて祈り続ければ、病人にとりついていた物の怪は恐れをなして退散するとされていた。その際、物の怪は僧や病人のそばで控えている「憑坐」(よりまし)と呼ばれた霊媒に乗り移り、場合によっては自分がどういう霊で、どういう目的でとりついていたかを語ることもあると言われていた。ここで思い起こさずにいられないエピソードのひとつは、源氏物語の「葵」の巻。光源氏の年上の恋人六条御息所が、源氏の正室葵上に嫉妬して生霊となってとりつき、ついには呪い殺してしまうのだが、その場面で御息所の霊は女童に乗り移って浮気な源氏に恨み言を言う。あくまでもフィクションではあるが、人間のどろどろした暗い一面を鮮烈に描いたこの箇所は、普遍の人間ドラマとして現代人にも十分に訴えてくる。オカルティズムに敏感だった中世の人々はどんなに身近に感じたことだろう。

話がそれてしまったかもしれないが、このような激しい思い込みの中でも祈禱はそれなりの役割を果たしてきた。「平家物語」のような軍記物の中にも一例を見つけることができる。平清盛の娘徳子は高倉帝の中宮であった女性だが、後に安徳帝となる皇子を出産する場面では、後白河法皇までがみずから安産の祈禱役を買って登場する。他の僧侶達が力を尽くして祈っても、憑坐に乗り移っていた悪霊はあばれ狂っていたというのに法皇が千手経を読まれると流石におとなしくなり、これに力づけられた中宮徳子は男子を安産したとある。気休めであるとか偶然にすぎないと言ってしまえばそれまでだが、我々現代人から見ても祈禱はここでも明らかに功を奏しているのではないだろうか。気の持ちようひとつで結果に好影響を及ぼすということはよくあるが、その当時は宗教の

力や信仰の深さが何よりも重要視されていたので、あらゆることの結果はそれに大きく関わっていると信じられていたようだ。さらには、人の生涯は前世にどれだけ徳を積んだかで良し悪し（幸せになれるか憂きめをみるか）が決まり、また現世の罪業の報いは必ず来世で負わなければならないという仏教思想が広く知れ渡っていた為、来世での幸せを希求して出家し仏縁を結ぶことさえ多く行なわれていたというのだから、祈禱がどれ程人々の救いの拠り所となっていたかがうかがい知れるというものだ。

信仰の目的—人は何故に神や仏に救いを求めるのか—は人それぞれであり、人間にとっての永遠のテーマだともいえる。そうむつかしく考えないで、「祈る」という行為で精神にゆとりを与えて心を豊かにするところにも宗教思想の存在価値はあるのだろう。私事で恐縮だが、昨年末にそれまで離れて暮らしていた祖父母と同居を始めたところ、ずっと気弱で病気がちだった祖母が異常に元気になり、あふれるパワーを持ってあます程になった。祖母はひたすら「これもご先祖様と仏様のお導き」と信じきっており、私も「病は気から」という諺もまんざらでたらめではない、と痛感せざるを得ない状況である。私は小学校から大学まで、カトリックの女子校で、キリスト教精神に基づく一貫教育を受けてきた。卒業して早や6年になろうとしているが、今でもキリストの教えや聖書の言葉を身近に感じることは多い。死ぬまでには洗礼を受けて信者となり、是非とも天国へお導きいただきたいと最近切に願っている。

(名古屋大学医学部放射線医学教室事務)